

グースベリーの熟れる頃

宮本百合子

青空文庫

小村をかこんだ山々の高い峯は夕日のさす毎に絵で見る様な美しい色になりすぐその下の池は白い藻の花が夏のはじめから秋の来るまで咲きつづける東北には珍らしいほどか
るい、色の美しい景色の小さい村に仙二は住んで居た。

十八で日に焼けた頬はうす黒いけれ共自然のまんまに育った純な心持をのこりなく表して居る、両方の眼は澄んで大きな瞳をかこんだ白眼は都会に育った人の様な青味を帯びては居なかった。

何の苦勞と云う事も知らずに育った仙二は折々は都会のにぎやかな生活をするのでその土地の方言は必してつかわなかった。

下帯一枚ではだして道を歩く女達が太い声で、ごく聞きにくい土着の言葉で遠慮もなくとなり散らすのを聞くと知らず知らず仙二は頭が熱くなって来る様にさえ思った。

冬と春先のみじめな東北の人達はだれでも力のみちたはずむ様な夏をやたらに恋しがる通り仙二は夏をまだ雪の真白にある頃からまって居た。

池の水草の白い花が夕もやの下りた池のうす紫の中にほっかり夢の様に見える様子や、泳ぎながらその花で体中を巻く時の美しくしさや快さなんかも思った。

何がなしに仙二には夏の来るのがいつもより倍も倍も待遠かった。

毎日毎日若い仙二は夏のうすみどりの色が自分をまねいて居る様に思えて居た。

桜は美しくしかったが仙二の心を引かなかった。

花が散ると仙二のまちなか夏はもう目の前に来た。

山々はみどりのビロードを張りつめた様に牧場には口に云えないほどの花が咲き出して川の水も池の面も元気の好い太陽にくすぐられて微笑んで居る様に道にころがって居る小石にさえ美しさが輝き出してまるで小鳥の様に仙二はうすい着物に草履をはいてはそこから中を歩き廻った。

山から山へ、野から又野へ響く様な気持で小供の様に細い澄んだ歌を唄う事もあった。

其の日も仙二はいつもの通り軽い身なりで池のふちを歩いて居た。

もう夕方の香りの有りそうなもやがかなり下りて川で洗われてしっとりとなある背の馬が思うままにのびた草を喰べながら小馬を後につれながら同じ池のふちを歩いて居た。人になれきったその馬の首を撫でたりカナカナと調子をあわせて口笛を吹いたり何とはなしの嬉しさが体の内におどりくるって居た。

池のくいによっかかって居た時池のすぐわきを二つの声がよぎって行った。

一つの声はまだ育ちきれない女の若々しきを持つて早口に通る響をもつてなめらかにいろいろの事を話し、一つの声は余裕のある生活をして居る年よりの声であった。

仙二ははじめられた様に振りつかへった。

切り下げの白っぽい着物の上に重味のありそうな羽織を着た年寄りのわきにびったりとついて長い袂の大きな蝶の飛んで居る着物にまつ赤な帯を小さく結んで雪踏せったの音を川の流れて交つて響かせて行く若い女の様子を仙二は恐ろしい様な氣持で見た。

二つの姿はまがつて大神宮の方に見えなくなつた。

仙二はフットあたりを見廻してから口笛を吹き出して何のあてもなく足元の花をむしつた。

そうして何となく重い物を抱えた様にして家にかへつた。

それから後毎日夕方になるときつとその二つの姿を見た、いつの時でも女はきつと赤い帯に雪踏をはいて居た。

二三日たった仙二は年寄は自分が先からもチヨクチヨク会う人だと云うのを知りその人達の住んで居る杉並木の奥にある平屋なんかも思つた。

仙二はまだ見た事もない髪形や着物の模様を批評するよりただ珍らしいと思つてばかり

見た。

その家のわきを通るとその娘の笑う高い声や戯言を云うのがきこえ夜の静かな中に高く
て細い歌声がこまかくふるえて遠くまでひびいて居る事もあった。

高い張った声とはつきりした身なりは仙二がどうしても忘れる事は出来なくなった。

一言自分のために――

こんな事も思つて娘のあの早口さを思い出したりしながらも昼間その家の前の一本道な
んかで会うときつと道もない畑の中をわたつて反対の方に行つてしまった。

おどおどしながら仙二はまだ若い娘が落ついた取りすました眼付をして平らな足つきで
今まで来た道を一寸もかえないで行くの不思議に思つた。

歩く時いつでも右の袂の中頃をもつて居るのが癖だと云う事を見つけて仙二はわけもな
く可笑しかった。

その娘は村の人誰からも快くあつかわれた、そしてだれでもが、

お嬢さんとか、お嬢さま、とか呼んで居た。

仙二は朝早く起きるとすぐ池にとんで行つた、そうして着物をぬぐとすぐまっさおな水
面に水鳥の様に泳ぎ出した。かなり広い池をのこりなく泳ぎまわつて盛の藻の花をつきる

まで取った。

茶色のくきの細くて長いのを首にかけて上った時、仙二は涙をこぼしそうに嬉しかった。その経と茎をつなぎあわせて輪をつくつてその間に池のまわりにさいて居る野の花をあみこんだそれを池のわきの木の枝にひっかけて仙二は見て居た。

見て居るうちにそれがあんまりわざとらしいのに気がついた。

こんな事をして自分がしたとは知らなくつてもいや味な事をすると思ふかもしれない。仙二は丁寧にまたその輪をほぐした。

長い短かいのあるまんま花だけをそろえて、その元を細いしなしなの茎を持った花で結えた。

それを池から間もない所にある娘のうちの垣根にひっかけて仙二はにげる様にもとの草原に来てころがった。

昨日娘が池のふちを歩きながら、藻の花が欲しいと云つて居るのを仙二はきいた。

「取つてやろうか」その時すぐ思つたけれ共大方はもう花卉を閉じてしまつて居たので同じ取るんならあしたまだ花の目を覚したばっかりの処を取った方が好いと思つて仙二は何となし胸のおどる様な氣持でその晩は床に入つたのだつた。

青い空とみどりの木の梢を見ながら娘が垣根に欲しがって居た花がひっかかって居るのを見つけたらきつと、

あらまあ——一寸お祖母様あの花が有る事よ

と云うに違いない。そうして背のびをしながら花をおろしてそれからどうするだろう。

仙二ははてしなくいろいろの事を思いつづけた。

しずかな中に思つて居る事は仙二にこの上なく楽しいそして又それと同じ位悲しい事だった。

仙二は立ち上つて娘の垣根の処に行つた。

垣根に身をよせて中の様子をきき耳をたてて居た。

早く顔を洗つて来るものだよ。

だつてお祖母様——まだほんとうに覚めきらないんですもの

こんな事を云つてかるい声で笑うのが聞えると仙二は誘われる様に微笑みながら藻の花の茎を前歯でかんで一つ処を見つめた目はしきりに間ばたきをして居た。

かなりの長い時間が立つても花の事は何とも云われなかった。奥の部屋で女中と笑つて居る娘の声や筆筒のかんの音なんかが意地悪いまでに仙二の気をいらだてた。

首を一つふつて仙二は垣根からはなれてどこと云うあてもなく畑の方に歩き出した。

畑地の足のうずまる様なムクムクの細道をうつむいて歩きながら青い少し年には骨立つた手を揉み合わせては頼りない様に口笛を吹いた。

畑の斜に下つて居る桑の木の下に座つて仙二は向うに働いて居る作男のくわの先が時々キラツキラツと黒土の間に光るのや、馬子が街道を行く道かならずよる茶屋めいた処の子達が池に来て水をあびて居るのなんかを見て居た。

仙二のすきな歌も口には出て来ず、こないだの晚娘がうたつて居た細かい節廻しの歌を思い出し思い出し所々間違えながら小声にうたつたりした。

畑地に座つて仙二は時の立つのを知らなかった。

もう午近くなつた頃、向うの葡萄園の方からしぼりの着物を着た娘が女中と何か話しながら来るのを見つけた。

サーツと潮の寄せて来た時に仙二は頭があつくなつた。いつもの通り桑の木影に前にもまして体をすくめて耳と目は三人分のを集めたほどきとく働いた。

娘達は仙二のかくれて居る桑の木から二三間左の細道を歩いてきた。

まっすぐな光りをうけてうす赤く娘の顔はのぼせて素に着た海の色に着物から頸がぬけ

た様に白く赤い帯は下の方で二つのみみをたらしめて結んであった。

いつもの通り名も分らない髪に結つて白い籐のかごの中にしたりするような葡萄の房の大きいのをいっぱい入れて腕にひっかけて居た。

女中と笑うたんびにかなりそろつた前歯がひかつた。

仙二は娘の姿がかなり遠くなり高い声がごく極くなめらかに聞える様になってから立ちあがつて、見えもしない雪踏のあとをたどる様にして家にかえつた。

大切なものの番をして居る様に仙二はそれっきり他所に出なかつた。

そうしたまんま仙二の目先に、はかないまぼろしの見えるまんまに日が立つて行つた。

絶えずチラツク若い心には魅力のあるまぼろしに、一日のうちに泣いたり眼には涙をためながらも微笑まされたりしなければならなかつた。

辛い嬉しさは仙二の感情の全部であつた。

一月ほど日が立つ間には、川で雑魚をすくつて居る娘も見だし野原の木の下で小さくて美しい本によみふけて居るのも見たけれ共、娘が一人で居れば居るほどその傍を通る時は知らず知らずの間に早足にいそいで居るのだつた。

雨のしとしとと降つて山々がポーツとして居た日に仙二は何心なく小さいうちから行き

なれたたつた一人ぼっちで住んで居るそう富かでないお婆さんの家へ行つた。椽側に赤い緒の足駄と蛇の目が立てかけてあるのを見つけた。

それでも何の気なしに中に入るとうす暗い中に婆さんと向いあつて思い掛けず娘が丸っこい指先で何かして居た。

仙二は二足ばかり後じさりした。

帰ろう！

稲妻の様にそう思うと、お婆さんは眼鏡をふきながら、

仙ちゃんかえ、お入りよ

孫をよびかける様に云つた。

仙二は赤い顔をしながら部屋の間際にすわつた。

娘は絶えず丸あるい声でいろいろの事をとりとめもなく話しながら人形の着物を縫つて居た。

まつ赤な地へ白で大きな模様の出て居る縮緬の布は細い絹針の光る毎に一針一針と縫い合わせられて行くのを、飼ひ猫のあごの下を無意識にこすりながら仙二は見えて居た。

自分の居るのをまるで知らない様に落ついた眼つきで話したい事を話して居る娘の様子

を見て居ると重い重いしめられる様なわけのわからない悲しさが仙二の胸に湧き出して来た。
た。

次の話の間がとぎれた時低い声ではばかり様に、

私しやあ、町へ行かなけりやあならない用が有るもの、ねえお婆さん又来るよ。

と云いすてて仙二は家へもかえらず町にも行かないで池の面に雨の雫が落ちて小さいうろこ形を沢山作つて居るのを見ながら、とめどなく涙をこぼした。

何にもたよるものがないと云つた様に池のくいにもたれて、足元の草の間から蛙が飛び出して行く様子にも、傘の雨のあたるささやかな音にも涙はさそい出されて遠くからの子守唄をきいた時にはもうたまらなくなつてぬれてひやびやとするくいの木の肌に頬ずりをした。

まっすぐにあるけなげな気持で下を見つづけて家にかえるとすぐ机に頭をのつけて雨の音を遠く近くききながら寝るとはなしにうつとりして居た。

そんな、辛い気持になりながらも仙二は翌日は又そとに出た。

雨上りの路が大変悪かつたんでどこにも娘のかげは見えなかった。

それから三日ちつとも娘の姿は見えなかった。

もう娘に会えないと心にきめて朝早く川沿を歩いて居た仙二は、とび上るほどうれしく
そして又おどろきもした。

この村に育った色の黒い娘と二人でひざまで水につけて雑魚をすくつて居る赤い帯の姿
を見つけた。

仙二はだまってどての上からさわぎ笑つて居る二人の娘の顔色の違いにおどろかされて
居た。

白い瀬戸を引いたなべの中に青光る小魚が泳いで居た。あみを流れのすぐそばに置いて
二人は今すくつた少しばかりの小魚をなべの中にあけて居る間にあみは一つフラフラと流
れ出した。

二人の氣のついた時にはもうかなりはなれた所を浮いて居た。

「アラ―」

先に氣のついた仙二の娘はとび出した様な声で叫んだ。

掛声をかけられた様に仙二はどてからかけ下りて裾をつまんだまんま水をわたつて五六
間先に行ったあみをつかまえた。

かたまつて見て居た仙二の娘はあみを手にとるとすぐ、

まあ、ほんとうに有難う。

たった一つつきりあみを持つてないんですもの、なくなったら随分困るところだった――

いかにも嬉しそうに顔いっぱい笑いながら礼を云われた時仙二はふるえながら、

いいえ

と云ったまんまどうしていいかわからない様にしてもとの堤に立って居た。

やがてまもなく二人が帰ってしまったあとを堤に座ってさつき娘の云つて呉れた言葉とあのはずんだ様な笑声を思い出した。

まあほんとうにありがとう

と云つた若い声はも一人の子がだまつてただ立って居たのにくらべてよけい仙二にははつきりと覚えられた。

低いふるえを帯びた溜息は幾度も幾度も仙二の唇を流れ出して草の根元に消えて行つた。死んでもいい時が来た様にさえ思えて居た。

その次会つた時には、

こないだどうもありがとう

こんな事も云う様になったと云うことがいかにも大きな事か大変な事のように感じられて、その次にかけて呉れる言葉を想像した。

けれ共その次に行き会った時にはただ極く少しばかりの微笑を口のはたに浮べたばかりだった。

仙二の心の上には又重いものがのしかかった。

娘の夢の様な微笑に胸をおどらせながら夏の終り頃まで仙二は暮した。

けれ共九月に入ってから一寸も影を見ない様になった。

病氣でもしてるかしらん

やせて床にねたきりの可哀そうな様子もその先の悲しい事まで想像して涙さえこぼして居たけれ共、きく人はだれもなかったんで不安心な日をじめじめと暮して居た。

娘に会わなくなってから十日ほどたつて仙二は又お婆さんの家へ行った。

心置きなくお婆さんはいろいろの事を話しながら、

御隠居さんも淋しがってねえ、今も私が行って来たので――

お嬢さんが東京にお帰んなさったのでねえ

何とはなしにこんな事を云った。

仙二は体中の血が凍るかと思えた。だまって一つところを見つめて居て、やがていきなり立ちあがって縁に置いた花の束を取るが早いか大急ぎに走って池のふちに行った。笑った様な面を見て堤をのぼって初めて娘に声をかけられた処に座った。

火の様な涙をボロボロとこぼしながらコンモリとそろえた花をむしってはすてすてした。ちぎられた哀れな花は青い水面を色どって下へ下へと、末のわからない旅路について行った。

涙にくもった眼でゆられゆられて居る花を見て居た仙二は一番最後の赤い小さい花を水になげ込んだ時手を延したまんま草の中に顔をうずめた。

草の葉のかげから弱々しい囁りなきの声はいつまでたってもやまなかった。

その日つきり仙二はそと出のきらいな人になったけれ共、月のきれいな時にはきつとわすれられない堤に座って夢の様にあわく美しく思い出をたどった。

グースベリーの熟れる頃に――

仙二の心はこの一言を思う毎に重く苦しく、そうして微笑えまれるのだった。

グースベリーの熟れる頃に――

青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集 第三十巻」新日本出版社

1986（昭和61）年3月20日初版発行

※1914（大正3）年3月27日執筆の習作です。

入力：柴田卓治

校正：土屋隆

2008年2月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

グースベリーの熟れる頃

宮本百合子

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>